

## 第2回教育セミナー 実績報告書

開催日時：平成26年8月23日(土) 13:30～16:45

会場：日比谷図書文化館コンベンションホール(千代田区日比谷公園)

### 1. 開会式



＜理事長挨拶＞(以下、要旨)

子どもの実態は多様です。1つの問題のあるやり方ですぐに解ける児童もいれば、そのやり方ではどうしてもできない児童もいます。いくつかの文字を写し取ろうとしたときに一気に7つの文字を写し取れる児童もいれば、3つしか写すことしかできない児童もいます。

子どもたちは、それぞれに多様な学び、多様な個性をもっていて、また、それぞれに違う学び方で違う興味をもっている。そのことを私たちが共有することが大切なんだと思います。

今日一日、“子どもたちにとって本当に大切な学び”について、皆さんと一緒に考えていける場になれば本当に幸いです。

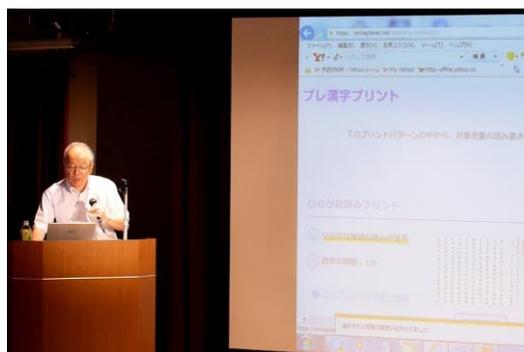
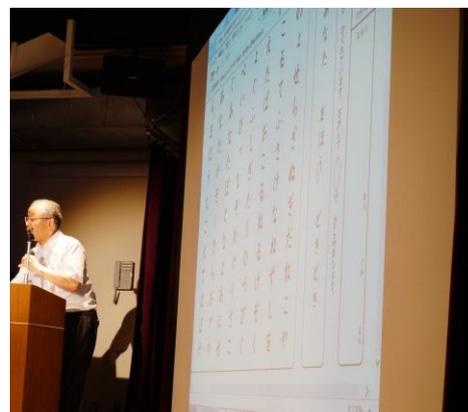
### 2. 【第一部】「読み・書き」が苦手な児童の学習意欲を引き出す“ヒ・ケ・ツ”

講師：小池敏英 東京学芸大学教授

＜小池教授の講演＞

“学習意欲”といものと“読み・書きの苦手”というものは自分(個)としては如何ともしがたく、そういう相対立したものをどう克服していくかはなかなか難しい。読み書きの苦手については、大人になっても読みの苦手は持続するということが分かってきましたので、そういう点では、その「読み」を教育としてどれだけ実用的なレベルでどう達成させるかということが課題になってきています。

NPO法人スマイル・プラネットでは、通常学級の中で苦手をもっている子どもたちが適切なサポートを受けられる仕組みをつくることを通して、この課題に貢献できないかと考えています。



漢字単語の読みは記憶が関係します。絵を合わせて見せるなどしてその漢字のイメージを高め、意味がとれるようになると読めるようになるという調査結果が出ています。学習する漢字を子どもたちにとって有意義語にしていくことが大切です。

文章を読めないことは、「学習意欲がもてない」ことにつながります。ひらがなや漢字が読めるようになること自体、有意義語となり、理解が進むこととなります。また、読めない漢字は書けません。そのことから漢字単語の読みの重要性を強調したいと思います。世の中に存在していない漢字単語の「読みのワーク」をスマイル・プラネットでは Web で提供しています。

### 3. 【第二部】“学ぶ意義”を自分とのつながりの中で捉え、実感する！

講師：藤田晃之 筑波大学教授



#### ＜藤田教授の講演＞

本日は、NPO 法人スマイル・プラネットが発行している『つ・な・ぐ』という冊子を使いながら、子どもたちにとって学ぶ意欲ってどういうことなのだろう。それを将来につなぐってどういうことなのだろうということを考えていきたいと思います。

子どもたちの多くは、今やっている勉強が将来に関係していると思えない、“こんな勉強をやっていてもどうせ将来使えないよな”という気持ちを強くもっています。それが、子どもたちの足を引っ張っているのではないか。キャリア教育は、学びの意味を将来との関係で提示し、学習意欲の向上につなげようということです。現行の学習指導要領がキャリア教育に期待しているのも、まさにこの点です。

本誌の編集委員である岩土先生にご登壇いただき、「米づくりのさかんな地域」の単元で、今、学んでいる“米をつくるということ”と“子どもたちの学び”をどうつないでいくか、具体的な実践例をご発表いただきたいと思います。（実践報告略）単元を踏まえながら、その単元に埋まっているキャリア教育の宝を探してみると、生産と消費との間に入ってくる人たちも浮かび上がってくるのではないかと、そういった中で、様々な人たちの思いが1つの製品やサービスの中に集約されている、しかも“君たちも大人になるということは誰かのために何かをする、そういう役割を担うということなんだ”というキャリア教育の大切なところにこの単元がつながっていくのではないかと、そういう思いで本単元の展開を構想し、本誌に掲載しました。



『つ・な・ぐ』の算数の「立方体や直方体の体積」の単元の事例です。ここでは、複合図形の体積を求めようというところですが、いろんな考え方で求められるのです。このことを生活場面や将来につながるということを示すのにマンガ資料を作成しました。このマンガを通して、多角的に見るということは、様々な場面に応用がきくのだということを実感することができのではないかと考えたのです。いろんな角度からものを見るといろんなつながりが見える。算数でやったことは算数だけじゃない。このような発展の仕方では算数科を捉えることが大切なのだと思います。光を当てるとすべての教科の中に、“キャリア教育の宝”がたくさん埋まっているのです。

いずれにしても、「今」「目の前のこの子たちに」「この教育活動を通してどういう力をつけさせたいのか」これを考えることがキャリア教育の根源的な問いでもあり、同時に、教育活動全体の根源的な問いなのかなと感じています。

#### 4. 【第三部】シンポジウム 「教科調査官に聞く！」

～理科・社会の小学校の学びは、子どもたちの将来に何を残したいのか～

講師：村山哲哉 文部科学省教科調査官(理科)

澤井陽介 文部科学省教科調査官(社会)

司会：藤田晃之 筑波大学教授



＜村山調査官 理科は、なぜ勉強するの？＞

私は、“なぜ”というのは子ども自身が考えることであって、私が“〇〇のためです！”と言って、納得できるようなものではないと思っています。そこで、どのように答えるかというと、“何に対してどのように学ぶのか”ということが非常に重要だと思うのです。それによって、学校では各教科領域に分かれているということですね。理科は何を学ぶのか、どのように学ぶのか、それによって最終的には“なぜ”が出てくるのだと思います。自然の仕組みがどうだとか、自分の生き方がどうだとか、子どもたちがくり返しくり返しするうちに、子どもたち自身ももってくるのが重要なんじゃないかと思います。

＜澤井調査官 社会科は、なぜ勉強するの？＞

1つは「人間の働きをしっかりと見る」ということだと思います。私たちは一人で生きているわけではないですからね。いろんな人とつながり合って生きているわけで、その時に大事なことは、人々の働きを見ていく、これが1つ。もう1つ大きなことは、「自分の頭で考えて判断する」ということだと思います。これは社会科がどうやって生まれてきたかの経緯を見ると、やはり“戦争を繰り返さず、平和で民主的な社会をつくる”ということです。そのために自分の頭の中で考え判断できる子どもを、ということだと思うんですよね。



<司会：藤田教授>

理科や社会を学ぶ意味・意義についてお伺いしました。そして、私たちの知を便宜的に分けたときに社会科と呼び理科と呼びますが、最終的に子どもたちに残していきたいもの、子どもたちに身につけさせたいものは共通していると感じました。

さて、各教科で身につけさせたい力を子どもたちに付けるには、どのような授業を展開していけばいいのか、教えてください。



<村山調査官 理科の力をつける授業>

理科の授業をどのようにするかという「問題解決」です。その「問い」をもつような手立てをどうしていったらよいか、これが理科の授業の1つの大きな山場です。そもそも問題解決というのは欲求なのです。“これ何だろう”と思う理解欲求と“〇〇したい”という達成要求です。自然事象への働きかけ、子どもが何か問いをもつような働きかけ、場を用意するということ、そして実験に入って実験から何が言えるか、これは体験活動なんですよ。理科という教科は体験で引っ張るんです。どういったものを見せるかどういった経験を引き出すか、どういった実験をするか、ここから言語活動が生まれてくるのです。

<澤井調査官 社会の力をつける授業>

最初の社会事象との出会い(社会事象との当面、資料の準備)をしっかりしてあげて、子どもの具体的な疑問をみんなの(全体)の疑問にする。そして予想して調べるのですが、事実を元に調べ、現実から離れないことが大切です。そして時間的に見ていく、空間的に見ていく、多面的に立場を変えて関係的に物事を考えていく、みんなで考えていく、そうすると何を学ぶのが見えてくるのです。そしてそれが言葉になって表現されてくる。「分かったこと」と「自分の考え」を常に意図的に書かせていくと、子どもたちは、たくさんの学びを事実の理解以上にしていくのだと思います。



<↓会場の様子>

